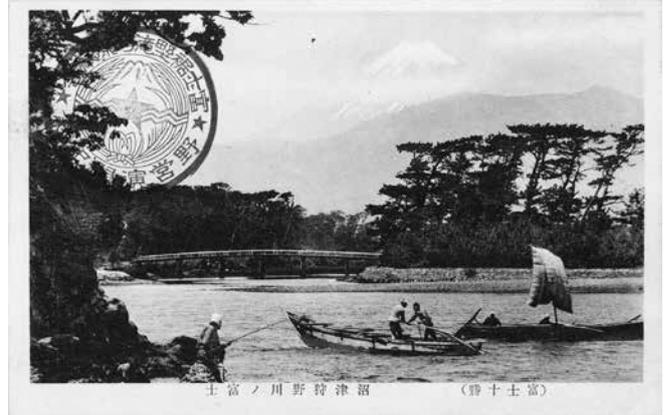




絵葉書 沼津富士八景 河口の富士 (蘭契社)



絵葉書 富士十勝 沼津狩野川の富士



絵葉書 沼津名勝 狩野川河口ヨリ富士ヲ望ム



絵葉書 沼津牛臥名勝 我入道の富岳

絵葉書に見る旧港橋

千本公園と浅間町を結ぶ浜道に架かる緑橋の直ぐ上流、聖隷沼津病院前の三又橋の近くで、北から流下する子持川と北西から東に流れる草刈川が合流します。その下流は観音川と呼ばれ、約1.6km流れて河口近くの狩野川に合流していました。観音川の名称は、近くの「浜の観音さん」とも呼ばれる長谷寺に因んだものと見られます。

草刈川と観音川は、千本浜の砂礫州の微高地と黄瀬川の運んだ砂礫で覆われた鮎壺の滝付近を扇頂とする緩やかな扇状地状の地形の境に沿う低地を流れ、河口付近は狩野川の自然堤防に出口を塞がれ、幅の広い沼沢地となっていました。ここは船溜まりにもなっており、元々の沼津の湊であると考えられる人もいます。

絵葉書に写された橋は、観音川の河口近くの松林の自然堤防と千本松原を結ぶ里道に架けられた橋です。

軟弱な地盤に架けられた狭い木橋で、歩くと揺れるため「こんにやく橋」と呼ばれていました。「富士見橋」とも呼ばれたようですが、「港橋」が正式名称のようです。大正15年(1926)至誠堂書店から発行された「沼津全図」には「蛇松橋」とも記載されています。

この位置に、戦前に掘り込み式の内港が建設されると、橋は撤去され、観音川は西側に流路を移され、新たに下流側に短い「港橋」、上流側に「富士見橋」が架けられました。

さらにその後の昭和40年代に外港が建設されると、外港と内港を繋ぐ水路が作られた結果、観音川の流末はその水路に流れ込んでいます。

また、外港と結ぶ水路の建設により、役目を終えた内港の出入口には水門が設置され、橋が架けられ、「新港橋」と呼ばれましたが、現在は埋め立てられています。

駿河湾の漁

森田 安男さんの漁話

我入道のイカ釣漁 その4

森田さんが漁師になった昭和30年（1955）頃はカマと鉛のツノをつけたレンケツの仕掛けでしたが、色のついた合成樹脂に鉛がついた市販品のツノのレンケツの仕掛けの方がイカの掛かりが良いということで鉛のツノは使われなくなっていくます。その後、市販品のプラのツノ（合成樹脂の軸にツメをつけたツノ）をレンケツにして、一番下に錘をつける仕掛けに変わっていきます。父の世代でも使用していた竹を削って軸にし、それにツメをつけて糸を巻いた自作のツノ（写真1）がイカの掛かりが良いということで、一時期、プラのツノに取って代わって我入道で流行ります。しかし、糸がほどければ巻きなおさなければならず手間がかかり、また、市販品のプラのツノの性能が上がっていったこともあり、現在ではプラのツノが主流です。プラのツノはイカのかかりは良いのですが、イカが暴れて揚げている途中で逃げられることが多いようです。これに竹軸のツノのように糸を巻いてやると不思議とイカがおとなしくなり、逃げられずに揚げるができるため、深層でイカ釣りを行う時には糸を巻いたプラのツノを使用していました。しかし、イカのかかりが良くない時は、前々号で紹介したテーラという餌を使ったイカ釣具に敵うものはないそうです。

多くのツノをつけて釣るレンケツの仕掛けで一度にたくさんのイカを捕ることができるようになりましたが、人力で曳き揚げる作業は重労働です。そこでクルマ（写真3）と呼ぶ手回し巻き上げ機を使うようになり、ツノも15～20本ほどをつけて行うようになりました。さらに時代が下ると、我入道にあった岩崎バッテリー（岩崎電池）がイカ釣り用のロボット（電動巻き上げ機）を販売するようになります※1。クルマでは一人1台の操作が精いっぱいでしたが、ロボットの導入で船に何台も積んでイカ釣りを行えるようになり、漁獲が増えました。しかし、当時のロボットの電圧は24ボルトで力が弱く、たくさんのイカがかかると止まってしまうことがありました。後に清水（静岡市清水区）の方から200ボルトのロボットが出るようになり、この問題も解決されていきます。それでも多くのイカがかかると一度は止まることがあります。しかし、イカの力が弱まるにつれて、ぎりぎり音を立てながら力強く巻き上げていくようになります。そして、たくさんのツノにイカがかかって海面に揚がってくる・・・漁師としてうれしい瞬間です。

かつては、海面をみればイカの群れが白くなって見えるほどおり、10mも釣糸を垂らせばたくさんのイカ

を釣ることができましたが、徐々にイカの魚影が少なくなっていくます※2。そして、我入道で盛んに行われたイカ釣漁もその機会が少なくなっていくます。しかし、イカに代わるようにして今まであまり揚がらなかったタチ（タチウオ）が通年で釣れるようになり、現在でも我入道の漁師の収入源になっています。

（話：森田安男氏 昭和15年生まれ 沼津市我入道在住）

※1 笹原俊雄『沼津我入道漁業組合漁業史』沼津我入道漁業協同組合 1987 P183 岩崎電池製イカ釣り機の普及は昭和48年（1973）頃となっている。

※2 ※1と同書 P184 マイカ（スルメイカ）の魚影が少なくなっていく時期は昭和40年代（1965～1974）となっている。

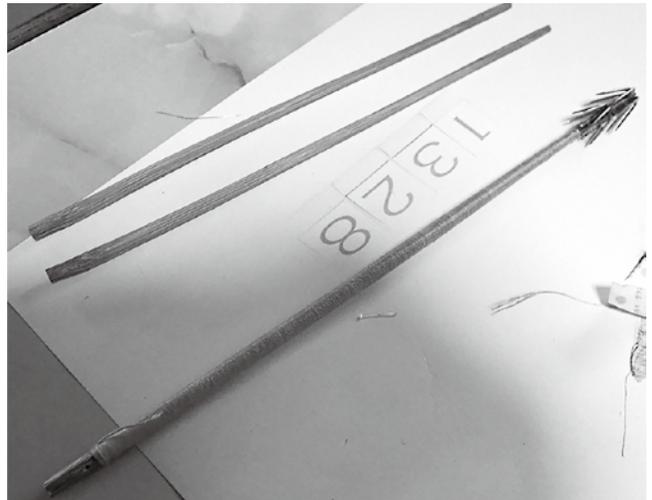


写真1：竹を削った軸とそれにツメをつけ桃色の糸を巻いたツノ

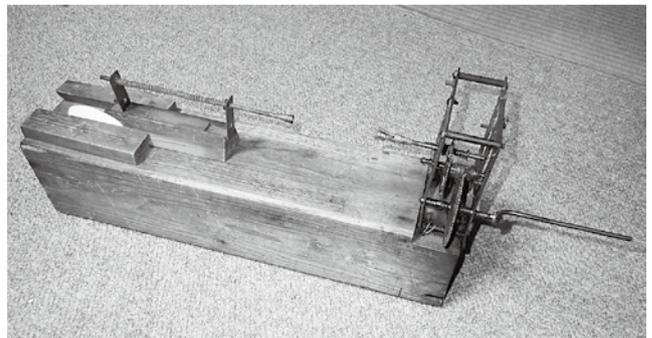


写真2：柱時計の歯車を利用したツノの糸巻き機



写真3：森田さんが使用していたクルマ

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その2 下香貫（塩満）

前回、下香貫の「島郷」の全般的な概観を紹介したが、今回は島郷の砂礫州背後の低湿地側について、地形や地質などの土地条件を軸に、塩満地区と背後の大久保山（瓦山）の麓付近に焦点を当ててみたい。

排水河川の塚田川支流の「新川」以南は海拔1.5m未満の低平な沖積地で、砂やシルトの軟弱地盤と排水不良地が特徴的な地形環境である。過去の地質時代における浅い海の名残のラグーン（潟湖）を彷彿させるように、静水域の堆積環境からやがて沼沢地や湿地となった過程が、有機物を含んだ細泥の堆積で確認できる。このような形成過程を反映した地形・地質の特色が際立った事例を、過去の大災害から確認してみよう。

●蓮池と瓦山（安政地震の被害状況） 嘉永7年（1854）11月4日午前9時頃の「安政東海地震」の際、下香貫では引き続き襲った「津波」のため、田圃が湖水のようになってしまった。当時の記録から2つ紹介する。

最初に下香貫の吉田神社勧請の由来に関わる写本で、万延元年（1860）に記された古記録の一部を挙げる。

以下、原文の次に読み下した内容や解説を掲げる。「桃郷村裏通り字は山下小原田汐入清水比田数拾式町あまり一時に深さ三四尺程沈地となりけり」「昼四つ時の大地震にて、俄に地砕けて、田畑の分ちなく水涌きいだし、砂石を吹出し、家は倒れ山は崩れ、（以下略）桃郷（字島郷）の裏通り側、字山下（林ノ下か）、字小原田（塚田の誤り）、字汐入、字清水の12町歩（約12ha）余りの田が一度に1m前後の陥没地になったと言う。その広大な地を塩満の人々は「メリ」と呼んだが、メリは「めり込んだ土地」を指す通称である。

また9時頃の「大地震」で突然土地が割れて砕け、田畑の区別なく水が湧き出し、砂や小砂利が吹き出し、塩満では倒壊家屋があった。さらに背後の大久保の山

（瓦山）が崩れたため、この世が消滅するのではと人々が恐れ、大変哀れな有様になったと言う。地割れ（地盤破壊）や液状化・噴砂現象が指摘されている。

次に、同じく「安政東海地震」に伴って発生した津波や噴砂現象、さらには山地崩壊の様子が描かれた記録がある。沼津藩士の山崎継述による『地震之記』であり、次のような内容が絵とともに記されている。

「田地変じて湖水となる」「湖水幅1町半深さ凡4、5間、田面なぞへに下り湖水と成る、是地震にて地くぼに成りし処而津波入しと云」とある。また沼津静浦往還沿いの「字ニツヤ」（ニツ家）では「此辺の田畑より焼砂或は小砂利又は水泥など吹出す」「水の吹上げし高凡8、9尺1丈斗の由土人云」として、さらに背後の瓦山の崩壊について「此辺山くづれ」「此高さ凡1丁」「山高さ5丁程」との指摘もある。

塩満地区中央部の田畑が、突然「湖水」のように激変したことは衝撃的であった。地震で周辺の田面などに沿って沈下した所へ、さらに襲った津波による海水が加わり、12町歩余りに水が溜まって一時広大な湖水のようになったと言う。特に顕著であったのが塩満寺の御堂の南西側、字清水の田地の湖水化で、地変の規模は幅110m程、長さ160m余り、約1.5haの田圃が深さ7mから9mも陥没して窪地となっている。

字清水地籍の「蓮池」がこの「安政東海地震」により生じた窪地の痕跡であり、明治・大正期の各種の地図にも描かれていた。このランドマーク（陸標）の蓮池は、昭和初頭の耕地整理事業で池が消失するまで、長く人々の記憶に刻まれていた。蓮池の中心には湧水が見られ、その後地元の塩満では長らく井戸に利用した。

また通称「ニツ家」の南東部、字子ノ起の農地は地下水面が浅く、「安政東海地震」で1m前後陥没した所である。『地震之記』の絵に添えられた文で、液状化により田畑ではスコリア（焼砂）・小礫や泥水などの「噴砂現象」が見られ、泥水の吹き上げた高さは2.5mから3m程と地元の人は言っていると記す。

今も地区内各所には、富士山起源の「新期スコリア」が散見する。この「噴砂」は地震の振動により、液状化した砂が水とともに、噴水のように地上へ吹き出す現象である。地震時の液状化現象は安政元年の地震の際、沼津城下や山王台、三島田町の砂質地盤の地でも確認され、その特異な点から記録によく残っている。

さらに絵では瓦山（大平山）の山地災害の深刻さを、字大久保の山麓に「崩積岩塊」で描き、また山腹には地震による山地崩壊を、2カ所に「山崩れ」と記して描いている。今も「瓦山神社」や周囲の果樹園には山崩れの痕跡がよく残っており、これらの傾斜角30～40°の急傾斜面は、地震により発生した「岩屑なだれ」の跡である。また「瓦山」の瓦の由来となった、斜面上



山崎継述「嘉永七甲寅歳地震之記」沼津市明治史料館蔵

で生産された岩片を主体とした岩屑（角礫や亜角礫からなる未固結堆積物）が、不安定なために急速度で斜面を落下する現象で「岩石なだれ」とも言う。

●崖錐地形と塩満の開発 絵に誇張して描かれた「大久保山」山麓部の平坦な高まりを、従来「海岸段丘」（海成段丘）や「洪積段丘」とする説がある。しかし指摘された「段丘地形」ではなく、山腹の斜面や山麓に分布するものと同様な「崖錐地形」と見られる。

島郷と志下との境に位置するこの小丘は単独の平坦面で、周囲には比高14m程度の地形面の分布もない。また海岸段丘（海成段丘）説も、海岸線に沿って階段状に分布する地形的特徴も有しない。高度・規模・形態に限らず、円礫の段丘礫層の分布も見られず、形成時期についても海面変化や地殻変動の点で、第四紀後期更新世（洪積世）に形成された「洪積段丘」とは言えない。

ここは崩落した岩屑の堆積した「崖錐地形」であり、畑地の円錐部分が土石流などによって洗掘され、凹凸部分に果樹が目立った土地利用も、南半分は削平されて宅地造成が進んだ。より北側の大久保公園や崩積岩塊の残る大久保緑地付近など、地震による大規模な崩壊跡地も、都市化に伴って雑壇状の宅地分譲が進んだ。

砂礫州との閉塞部北側、旧堂ノ川付近に目を転じると、塚田川の浸水問題がある。字塚田・汐入付近は深刻な軟弱地盤と排水不良地であり、緩流河川の塚田川沿いでは「感潮河川」故に古くから続く遡上現象のほ

か、河口部の浜水門の閘門閉鎖も加わり、集中豪雨時に周辺の田畑や宅地への浸水被害が生じている。開削した上流部の志下側で、静浦水産加工組合による汚染水処理問題は近年解決への道を歩み始めている。

交通基盤整備面を見ると、静浦地区の国道414号の慢性的な渋滞解消を図るバイパス整備が進む。大平に抜ける瓦山（大平山・象山）のトンネル掘削工事も貫通し、塩満の都市計画道路の整備が進捗している。

なお字塩満の中心集落は海拔2m前後の「沖積段丘」の微高地に立地し、周辺の砂礫混じりの農地では二毛作が行われていた。用水路は北側からで、字樋ノ口に上香貫分の狭小な飛び地があり、新川整備以前は水路末端の「吸干し」で、排水機能の窪地と推定される。南側の字汐入付近はメリやドブツタの湿田で、昭和初め頃に腰まで浸かって田植えをしていた。北側の七面山の麓に妙蓮寺、東側に塩満寺があり、中世後期には小集落が成立し、また字塩満に土師器散布地が、字清水に布目瓦の古窯跡もあり、奈良・平安期から居住や開発が見られた。

塩田による新田開発の「塩場」と異なり、字塩満の地名は「潮満」で、南側が字汐入であるように、塚田川から満潮時に遡上し、海水が浸入する低い土地からと言われている。その点でより上流側に位置するこの一帯が「浜新田」の田地として開拓する際、古くに浜溝を設けて「内潟浜」の入浜式塩田を試みた地の可能性もある。

資料館からのお知らせ

夏休み体験学習を開催しました

8月6日(金)と7日(土)の両日に館内で、夏休み体験学習を実施しました。

昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の中で中止しましたが、今年度は何とか開催することができ、定員を超える参加希望者がありました。

今回も、昔の道具を使ってみようという内容で、石



体験学習 石臼による粉ひきの様子

臼、台秤と竿秤、火打ち金と火打ち石を使って、粉ひき、重さの計量、火起こし体験しました。

粉ひきは、白米を上新粉に、大豆を黄な粉に、茶葉を抹茶にしました。簡単そうに見えますが、石臼を回すのに思いのほか力が必要で、皆さん苦勞していました。火打ち石は人気が高いのですが、火花を出すのが難しく、なかなか火種を作る所までには到達しないのですが、あきらめずに挑戦を続けていました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2021.9.25 発行 Vol.46 No.2 (通巻231号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp